

信太山丘陵の保全と活用に向けて

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 石 井 実

Toward conservation and restoration of nature of the Shinodayama Hills. Minoru Ishii (Graduate School of Life and Environmental Science, Osaka Prefectural University)

信太山は、大阪の都心から南へ30kmほどの和泉市北端の洪積台地上に広がる標高50~60mの丘陵地である。三本の大きな谷筋が通るなど起伏に富んだ約300haの丘陵には、樹林や草地、農地、湿地、池沼などがモザイク状に散りばめられ、多様な野生動植物に生息場所を提供している。一方、この地には古くから人が住み着き、弥生期の惣ヶ池遺跡や古墳時代の黄金塚古墳をはじめ、飛鳥期に建立された聖神社や平安期以降の熊野参詣に関わる史跡など、長い歴史に育まれた文化的資産が点在する貴重な地域でもある。「枕草子」に「森は信太の森」と讃えられ、平安・鎌倉期の歌人が和歌に詠み込んだ豊かな森は、現在は聖神社付近に面影を残すのみであるが、信太山丘陵自体は、全体として開発の波からよく守られてきた。

「信太の森」は、かつては水田稲作のための水源涵養林であり、江戸時代までは聖神社の社叢林として守られてきたが、信太丘陵は、明治4年(1871年)以降は陸軍の演習地として使用されるようになり、演習のために一部が伐採され、草地化した。また、明治初期には、明治政府により地租改正が行われ、この丘陵地の大部分が国有地となるとともに、一部は薪や炭、水の供給地として住民の「共有地」となった(小杉, 1994)。第二次世界大戦後、信太山丘陵の陸軍の演習地は自衛

隊に引き継がれたが、この地域の自然が大きな開発から免れて今日まで残されたのは、このような歴史の偶然によるものといえる。

現在の信太丘陵の自然を一言で表現すると、広い意味での里山的(広義の里山; 石井, 2001)といえるかもしれない。すなわち、信太山丘陵では薪炭や肥料、飼料の採取、農地や池沼の管理のために人が継続的に自然に働きかけ、その結果、極相へ向かう遷移の進行が止められて、二次的な草地や雑木林が維持されてきたものであろう。「信太の森」はシリブカガシなどの照葉樹が優占する極相の森だったと考えられるが、そのほとんどが既に失われてしまったことは残念である。そのかわり、現在の信太山丘陵には田園の風景が広がり、近畿地方の低地から失われつつある里山的な動植物が多く温存されている「生物多様性ホットスポット」のひとつとなっている。実は、絶滅の危機に瀕している里山の生物が自衛隊演習地内に残されているのは、全国的な構図になっている(石井, 1994)。

しかし、多くの里山と同様、信太山丘陵の里山的な自然も、近年急激に変貌し、そこに生息する生物の衰退が進行している。この「里山の崩壊」とも言える自然環境の変化は、戦後の燃料革命や肥料革命、牛馬飼養の停止などによるもので、放

棄された里山は遷移が進行してブッシュ化するか、開発の対象となるなどして消滅しつつある（守山，1988；石井ほか，1993；武内ほか編，2001；日本自然保護協会編，2005など）。

信太山丘陵においても、本来の里山としての価値は低下し、自然の変貌が顕著になってきた。この地域で特徴的な自然環境のひとつは谷筋の湧水湿地であり、そこはサギソウやトキソウ、コモウセンゴケなどの湿地性植物が自生し、ハッチョウトンボの生息する場所もあった。しかし、樹林の伸長と林床のネザサの繁茂により、これらの動植物の生息環境は悪化している。また、動植物の乱獲や産業廃棄物の投棄、樹木の伐採、残土による土地の埋め立て、道路建設、開発、外来生物の侵入などにより、丘陵地全域で大きな変化が進行している。さらに、地元和泉市も最近、散在する民有地を買収して、等価交換で自衛隊演習地内に16haのまとまった土地を取得し、スポーツ・レクリエーション公園を整備する計画を打ち出した。

このような経緯の中で、本会は2009年7月5日に現地見学会を実施し、それを受けて、同年10月18日午後に関開シンポジウムを開催した。

現地見学会には16名が参加し、「信太の森FANクラブ」の花田茂義代表と（財）大阪みどりのトラスト協会の天満和久事業マネージャーの案内で、上記の公園計画地と惣ヶ池湿地の保全事業地を視察した。また、視察後に「信太の森ふるさと館」において意見交換会を行い、信太丘陵の自然はきわめてユニークなものとは言えないが、都市近郊に立地することを考えると、よくぞ残された貴重な存在——という評価で参加者はほぼ一致した。この意見交換会の席で、なぜ信太山丘陵の保全が必要なのか、どのようにこの財産を後世のために活用すべきなのかなどを真剣に問い直すために、上記の公開シンポジウムを開催することが決まった。

公開シンポジウムは、「信太山丘陵の保全と活用に向けて」というテーマで和泉市立鶴山台南小学校体育館において開催された。このシンポジウムには地元住民57名を含む113名もの参加があり、和泉市の辻宏康市長もかけつけ、冒頭で挨拶をされた。その後、信太の森FANクラブの花田茂義代表から「信太山丘陵の自然と文化」について、大阪市立大学大学院の井上淳特任講師から「信太山丘陵の地形と地質—大阪層群と信太山礫層の不整合—」について、人間環境大学の藤井伸二教授から「植物相からみた信太山丘陵の自然」について、NPO法人いずみの国の自然館クラブの三輪健一郎事務局長から「信太山丘陵の動物相の特徴」について、（財）大阪みどりのトラスト協会の天満和久事業マネージャーから「信太山丘陵における湿地保全の取り組み」について、それぞれ話題提供があった。個々の内容については各話題提供者による報文を参照してほしい。

最後の総合討論では、時間延長して1時間近くも壇上と客席が一体となって熱い議論が展開された。地元の住民からは、このシンポジウムに参加して自分たちがいかに貴重なところに住んでいるかを再認識した、何とかそれをアピールして保全の方向を検討してほしい。昔、湿地にツルが訪れていたのを思い出した。自然を残すことは、住民の健康な生活に欠かせない、自然公園化を望む、などの意見が出された。また、話題提供者や共催団体の会員からは、自然公園構想が住民から持ち上がっていることは素晴らしい。このありふれた自然をそのまま楽しみながら残す道を探るべき。堺市が「ふれあいの森」の形で里山を保全している事例もあり、市長の決断が重要。16haの公園計画地のことだけでなく、自衛隊の所有している300ha近い土地の保全についても忘れるな、などの意見が出された。

午後1時から5時間近い公開シンポジウムは、

これがスタートのつもりでこれからも議論を続けようという締めくくりで閉会した。

この会の主催は本会であるが、補助金をいただいた日本生態学会近畿地区会のほか、(社)大阪自然環境保全協会、(財)大阪みどりのトラスト協会、信太の森FANクラブ、NPO法人いずみの国の自然館クラブ、泉州の自然と文化財を守る連絡会議に共催団体として、お世話になった。また、和泉市立鶴山台南小学校には会場の使用等で便宜をはかっていただいた。末筆ながら、厚く御礼申し上げる。

引用文献

石井実. 1994. 自衛隊がまもる草原性のチョウ類.

昆虫と自然, 29 (6) : 2-3.

——. 2001. 広義の里山とその生息場所に関する一連の研究. 環動昆, 12 : 187-193.

——・植田邦彦・重松敏則. 1993. 里山の自然をまもる. 171pp. 築地書館, 東京.

小杉興宏. 1994. 信太山の自然と昆虫. 昆虫と自然, 29 (6) : 15-19.

守山弘. 1988. 自然を守るとはどういうことか. 260pp. 農山漁村文化協会, 東京.

日本自然保護協会 (編). 2005. 生態学からみた里やまの自然と保護. 242pp. 講談社, 東京.

武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史 (編). 2001. 里山の環境学. 257pp. 東京大学出版会, 東京.

